

## 武蔵野日曜集会

## わがわざ

――ヨハネ伝5章1～24節――

1995年11月12日

神・キリストとの霊的な交わり 実言は実現する 信仰が無いことが本当の信仰（神交） 本当の自由の元祖はキリスト 安息とは魂が神さまの中に安らつて力を得ること 福音は楽音

## 【ヨハネ5:1～24】

1この後ユダヤ人の祭ありて、イエス、エルサレムに上り給う。2エルサレムにある羊門のほとりにへブル語にてベテスタという池あり、之にそいて五つの廊あり。3その内に病める者・盲人・跛者・痩せ衰えたる者ども夥多しく臥しいたり。（水の動くを待てるなり。4それは御使のおりおり降りて水を動かすことあれば、その動きたるのち最先に池にいる者は、如何なる病にても癒える故なり）。5ここに三十八年、病になやむ人ありしが、6イエスその臥し居るを見、かつその病の久しきを知り、之に『なんじ癒えんことを願うか』と言ひ給えば、7病める者こたう『主よ、水の動くとき、我を池に入る者なし、我が往くほどに他の人、さきだちて下るなり』8イエス言ひ給う『起きよ、床を取りあげて歩め』9この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり。

その日は安息日に当たりたれば、10ユダヤ人、医されたる人にいう『安息日なり、床を取りあぐるは宜しからず』11答う『われを医ししその人「床を取りあげて歩め」と云えり』12かれら問う『取りあげて歩め』と言ひし人は誰なるか』13されど医されし者は、その誰なるかを知らざりき、そこに群衆いたればイエス退き給ひしに因る。14この後イエス宮にて彼に遇いて言いたもう『視よ、なんじ癒えたり。再び罪を犯すな、恐らくは更に大なる悪しきこと汝に起ころん』15この人ゆきてユダヤ人に、おのれを医したる者のイエスなるを告ぐ。16ここにユダヤ人かかる事を安息日になすとて、イエスを責めたれば、17イエス答え給う『わが父は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり』18此に由りてユダヤ人いよいよイエスを殺さんと思う。それは安息日を破るのみならず、神を我が父といいて己を神と等しき者になし給ひし故なり。

19イエス答えて言ひ給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行かうはかは自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同



じく為すなり。<sup>20</sup> 父は子を愛してその為す所をことごとく子に示したもう。また更に大なる業を示し給わん、汝等をして怪しましめん為なり。<sup>21</sup> 父の死にし者を起こして活かし給うごとく、子もまた己が欲する者を活かすなり。<sup>22</sup> 父は誰をも審き給わず、審判をさえみな子に委ね給えり。<sup>23</sup> これ凡ての人の父を敬うごとくに子を敬わん為なり。子を敬わぬ者は之を遣し給いし父をも敬わぬなり。<sup>24</sup> 誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信ずる人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。

### ● 神・キリストとの霊的な交わり

皆さんとこのようにして集会を、決して習慣ではなく、一回毎に新しい気持でいたしていることを非常に私はうれしく思っております。何といっても、福音の兄弟姉妹というのは一番親しい間柄です。どうぞ、これからもずっとよろしくお願いします。

もうじきクリスマスが来ますが、クリスマスとかペンテコステとか、そういう特別な時だけやってくるような人もなきにしもあらずですが、我々にとっては毎日がクリスマスです。クリスマスの「マス」というのは「メッセ」というミサのことなんです。もともとカトリック教からきているので、宗教的なお祭のことをミサという。

我々は毎日がキリストにあずかるところの大事な集会です。私はそうやっていつまでも皆さんと許される限りやりたいと思っております。

では、ヨハネ伝5章に入ります。

「この後ユダヤ人の祭ありて、イエス、エルサレムに上り給う。」

イエスは北の方、ガリラヤ湖のずっと西の方のナザレで生まれたので、「ナザレ人」と言われる。

「エルサレム」

というのは

「神は平安なり」

という意味です。「平和」と訳している人がありますが、平和でなく「平安」です。

神さまと、あるいはキリストと自分との関係は平和ではなく平安です。平和というのは人間同士の関係のことで、平安というのは神と人との関係です。神・キリストと自分との関係がちゃんと立っていることが平安なんです。平安は非常に力のある状態で、何がきても決してそれに負けない。これが平安なんです。それは自分の信仰が強いからではない。

私は

「信仰」

という言葉が嫌いです。信じ仰ぐのではない。私は



「神交」<sup>「しんこう」</sup>

と書く。神・キリストとの霊的な交わりが神交です。神・キリストとの霊的な交わりが絶えたらクリスチャンではない。

「クリスチャン、クリスチャン」

と普段言っているけれども、本当の

「キリストのもの」

というのはそういうことです。

●実言は実現する

2 エルサレムにある羊門のほとりにへブル語にてベテスタという池あり、之にそいて五つの廊あり。<sup>3</sup>その内に病める者・盲人・跛者・瘦せ衰えたる者ども夥多しく臥したり。<sup>4</sup>（水の動くを待てるなり。それは御使のおりおり降りて水を動かすことあれば、その動きたるのち最先に池にいる者は、如何なる病にても癒える故なり）。

これは半分迷信的なことです。

5 ここに三十八年、病になやむ人ありしが、<sup>6</sup>イエスその臥し居るを見、かつその病の久しきを知り、之に『なんじ癒えんことを願うか』と言ひ給えば、<sup>7</sup>病める者こたう『主よ、水の動くとき、我を池に入る者なし、我が往くほどに他の人、さきだちて下るなり』。<sup>8</sup>イエス言ひ給う『起きよ、床を取りあげて歩め』。<sup>9</sup>この人ただちに癒え、床を取りあげて歩めり。

「起きよ、床を取りあげて歩め」

というこのキリストの言葉には力があるから、同時にその人は癒されてしまう。イエスというひとは大変なひとです。これだけの力のあるひとは、いくら預言者といえども、また使徒たちもかなわない。

「イエス」

とは、

「神は救なり」

という意味で、

「キリスト」

とは、

「油をそそがれた者」

という意味です。「油を注ぐ」とは、

「神の霊をそこに注ぎ入れる」

ということの象徴なんです。神の霊を注ぎ入れる象徴として、そういうことを旧約からや



つていた。サムエルのあたりからずっとやっている。

「ハレルヤー」

というの

「汝ら、神さまを讚美せよ」

という意味です。もともとヘブライ語の「ハールル」という字からきている。「ヤー」は「ヤハウエー（エホバ）」のことで

「神は生命なり」

という意味です。

キリストは言うと同時に、その力がはたらいっている。キリストの言葉は力のある言葉です。

「わが言は靈なり、生命なり」

とキリストは言われた。靈的な生命をもっているから、言葉が実言、実の言葉なんです。実の言葉だから、これは実現する。我々人間は言ったことをなかなか実行しないという、二段構えになっている。そんな二段構えではダメなんだ。言下に、直ちにそこに行動が起る。言葉自身が実は内的行動なんです。これは信仰（神交）もそうなんだ。仰いでいるのではない。神との靈的な交わりなんです。だから、聖靈の現実です。

### ●信仰が無いことが本当の信仰（神交）

聖靈の現実とは、キリストの十字架の贖いを本当に受けとることです。相対的な人間小池なんていうものは、その過去も現在も未来もキリストが既に贖いとおつてくださっている。救われているんです。これから救われるのではない。信仰がちゃんとしていれば救われるのではない。ゼロなんだ。だから私は

「信仰なんかありません」

と言う。自分の信仰がサムシングで何かでなければならなかったら、私はもうやめだ。私は何もない。だから、私は「無者」だという。もちろん、私は相対的な罪びとです。罪びとでありながら、キリストは、

「お前はもう救ってしまったぞ、私の十字架と聖靈でもってお前は救ってしまった」

と言われる。もう文句ないです。文句なしに平伏して、

「ありがとうございます」

の他に言いようがない。

「それでも私の信仰はまだまだです」

なんて言っていたら、はじまらない。自分の信仰なんてものは考えてない。

「信じ仰ぐなんてものはありません。私は何者ありません、無者です」

と。ところが、この「無」は、この「無者」は悟って無になつたのではない。キリストからいただいた無なんです。賜りたる無なんです。禅宗のように悟って無になるのではない。



よく「無我」というね。これは禅宗なら、悟って無になる。ところが、こちらはそうではない。キリストから無をいただいた。私はキリストから無をいただいて、ゼロにされた。そうすると、このゼロは無限大なんです。ゼロだと、キリストという無限大が入ってくる。「お前をゼロにして、そこに無限大の私が入っていくぞ」という。これほど大きな恵みはないではないですか。

「こつちの信仰がどうだこうだ」

と、そんなことではない。だから、私は自分の信仰なんか考えない。普通はみな自分の信仰というものを考える。

「まだ私の信仰はうすくて……」

なんて。キリストも

「信仰うすき者よ」

と、どこかで言ってるから、あのキリストの言葉に躓く。キリストにそう言われたら、

「私は信仰なんかありません。しょうがないやつです。あるのはあなただけです」

と答えたらいい。そうしたら、キリストは驚いて喜ばれるよ、

「お前は本当の信仰をもっている」

と。信仰が無いことが本当の信仰なんだ。「ゼロ＝無限大」(0＝∞)なんだ。

「お前にゼロをやった。そうしたら、無限大の私が入っていくぞ」

と。神・キリストは無限大のひとですから。キリスト自身は実は無者だった。キリストははつきり言っている、

「我自ら何ごとをも為しあたわず」

と。

「イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。』(ヨハネ5・19)」

「私は何もできない。神さまのやることを見て、その力でやらせられているんだ」と。キリストは無力者なんだ。無者、無力。力が無い。そうすると、神の無限力が入ってくる。こんな蛍光灯なんかいらぬ。太陽の光が入ってくる。自分の光なんかいらぬ。

「私には光はありません、闇です」

と言う。そうしたら、キリストは、

「私が入っていつて、お前を光の世界にしてやるぞ」

と言われる。

信仰に絶するんです。これを絶信の信という。自分の信仰に絶すると、本当の信が入



てくる。これは賜りたる信だ。だから、もう平伏して感謝する他にない。そうすると、上からの凄い力がくる。

「私は相対的人間小池なんでものを考えていません」と。そういう絶対の信の世界です。

「信仰なんかありません。何もありません。いや、あなたがその無をくださったんです。ありがたくてしょうがありません」

と。そうすると、その無のところに無限無量なものが入ってくる。

こんなことを言う牧師さんはおそらくいないだろう。

「あなた方はもつと信仰を強くしなさい。そうしたら、段々立派な行いが出てきますよ」

と、大体そんなところだ。ご苦労さんはなしだ。私はテレビで一遍このもの凄い福音の世界を本当に話してみたい。

「あれはとんでもない野郎だ。あれで牧師か」  
なんて言われるだろうね。

「私は牧師ではないよ、キリストの無者だ」と答えてやる。普通の人は私の話に躓つまずくだろうね。

### ● 本当の自由の元祖はキリスト

上から限らない光がくる、生命がくる、智慧がくるから、ありがたくてしょうがない。始末におけなくなる。

「始末におけなくなるような人でなければ本当の政治はできない」

と西郷南洲（西郷隆盛 1828～1877）が言った。西郷南洲自身が始末におけない人物だった。西郷さんは本当の真理のひとだった。だから、殉道的な死をとげた。私は「殉教」とは言いたくない。教ではない。道なんだ。殉道、道に殉じたんだ。私は教えという言葉は嫌いだ。「教育」ではない。本当は「道育」なんだ。今の小学校から大学にいたるまで、先生が——教えるのではない——一緒に道を歩こうということ。

「いっしょに歩こう、ああしなさい」  
ではない。

「いっしょに歩こう、ああしなさい」  
と言って一緒に歩くことです。

その日は安息日に当りたれば、ユダヤ人、医いされたる人という『安息日なり、床を取りあぐるは宜よしからず』

キリストはユダヤ教的な律法なんでものは全然超越してしまっている。律法を踏み越えてしまっている。超律法の世界です。超法です。旧約の法を乗り越えている。だから、こ



これは本当に自由なんです。自由というならば、キリストほど自由なひとはいない。

マルチン・ルターが自由の元祖みただね。それからシラー。けれども、ルターもシラーも、もつと本当の自由の元祖はキリストなんだ。何ものにもとられない。ただ神さまにだけとらわれている。

「神さまにとらわれていることが本当の自由」

なんだ。ルターは『クリスチャンの自由』という本の中でその角度のことを言ってます。

普通言っているところの「自由」というのは「勝手気まま」という意味だ。

「自分自身の勝手気ままが自由だ」

と思っている。そうではない。それは自分にとらわれていて、ちつとも自由ではない。自己にとらわれている。自己から自由にならなければダメなんです。生まれつきの我々の自己から自由にならなければ、本当の自由ではない。ところが、大体みんな自分にとらわれていて、そしてそれを自由だ自由だと言っている。それは「わがまま」というやつです。自由でも何でもない。

新約聖書のヤコブ書というのは行為のことを随分書いている。それだから、マルチン・ルターは、

「ヤコブ書は藁みたいなものだ。本当の信仰の世界とはちがう」

とけなした。これはルターも少し見損なつた。それは見たところ、ヤコブ書はそうですよ。けれども、ヤコブの言っている行為は行、即、信の世界なんです。

ドイツ人というのはものを分析して認識することが好きだ。本当の日本人は直観なんです。分析総合ではない。直観する。本質を見破る。ドイツ人でそういう本質を直観することのできた特別な人はゲートルです。ゲートルはドイツ人でありながら、ドイツ的なものを超越しています。彼はやはり本当に世界的です。ドイツの最大の人物は誰かというところ、私は文句なしにゲートルだと言いたい。ルターの上をいつてます。

ところが、おおかたはゲートルに躓いている。内村鑑三先生も藤井武先生もゲートルに躓いた。彼にはたくさんの恋人がいたものだから。それは躓くよ、普通のクリスチャンは。けれども、ゲートルは同時に女性を恋したのではない。その時その時に相応しい女性を愛した。

「ダンテはベアトリーチェひとり。ゲートルはいく人もいた。だから、ゲートルはダメだ」と、こういう判断をする。そうではない。その時その時に気の合う人と本当に交わったわけです。ゲートルはそうやっていろいろな女性を愛したけれども、その目的は何かというと、神にいくためだった。神への愛だった。女性にとらわれているのではない。

「永遠に女性的なるものが我らを引き上げていく」

というゲートルの有名な言葉がある。偉大な人間の言葉はヘタすると躓く。



## ●安息とは魂が神さまの中に安らって力を得ること

キリストは安息日であろうと何であろうと、そんなことにこだわっていない。「安息」というのは魂が神さまの中に安らって力を得ることです。力を得ないで、「安息日」なんて言っただけだ休んだってしようがない。我々はこうやって集会をしながら、力の世界に、生命の世界に入っている。だから、集会の終わるときには、私はいよいよ力に満ちている。ところが、集会が終わって

「ああ疲れた、月曜日はもぬけの殻だ」

と無教会のある先生が言った。冗談じゃないよ。それは自分のいわゆる聖書研究からものを言っているからそういうことになる。聖書は研究する本ではない。身体からだで読む本なんだ。註解書なんかいらぬ。

16ここにユダヤ人かかる事を安息日になすとて、イエスを責めたれば、キリストは安息日に人を癒した。何のかんのと人が言ったら、

17イエス答え給う『わが父は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり』  
18此これに由りてユダヤ人いよいよイエスを殺さんと思う。それは安息日を破るのみならず、神を我が父といいて己を神と等しき者になし給いし故なり。

19イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。20父は子を愛してその為す所をことごとく子に示したもう。また更に大なる業を示し給わん、汝等をして怪しましめん為なり。』

「神さまが子なる私を愛して、為す所をことごとく私に示すから、神さまの言葉に従って、させられているだけののはなしだ。自分では何もできない。われ自ら何事をも為し得ず」

と言われた。無力なんです。無力がいい。私もキリストから無力をたまわった。無力を賜ると、無限大のもの凄い力が上から入ってくる。

「私にだって力は多少ありますよ」

なんて言っているうちはダメなんだ。

「信仰なんかありません、何もありません」

と言うと、キリストが、

「では、私の神交をお前にやる」

と言ってください。上からみんなやってくる。キリストがくださる「しんこう」は神との交わり（神交）です。

「神との交わりのその現実をお前にやる」

と。私は神・キリストとの交わり——十字架・復活・聖霊——これをそのままキリストからいただく。



私が前に書いた文章がある。

「信仰が本質的には信交（信じ交わる）でなければならぬことは、即行の福音において述べたとおりである。自己放棄とか、身心放下とかは福音ではすべてキリストの中への投身的行為たる信即行において確かに体现できる最も素晴らしい霊的な内的行為である。」

これはヤコブ書のことを書いているところだな。

### ●福音は楽音

ヨハネ伝5章にもどります。

21 父の死にし者を起こして活かし給うごとく、子もまた己が欲する者を活かすなり。22 父は誰をも審き給わず、審判をさえみな子に委ね給えり。23 これ凡ての人の父を敬うごとくに子を敬わん為なり。子を敬わぬ者は之を遣し給いし父をも敬わぬなり。24 誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣し給いし者を信する人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。

これははつきりした言葉だね。この「信する」という言葉が躓きになるから、私は、「<sup>からだ</sup>体で受けとる、全存在で受けとる、体受する」

と言いたい。「信する」というと何かちよつと観念的になってしまふ。全存在で受けとる、体受することです。そうしたら、もう直ちに力がくる。私は新約聖書をもつと大胆な訳方をしたいと思つている。いずれそのうちにやるつもりです。

「それはギリシヤ語とちよつと違うではないか」

なんて言われても、表向きは違つたつて構やしない。ギリシヤ語の奥の神の言葉を、神の響きを訳していく。

まあ、やりたいことが多くて困つてしまつたな。簡単に地上を去るわけにいかない。百歳を突破するくらい地上にいないと、なかなか間に合わない。次から次へとやりたいことが出てくるからね。「わがわざ」というのは、

「自分のわざは自分のわざではない」

ということですよ。

「神さまがやれという事をさせられている。神の力でやっている」

ということ。「わがわざ」というのはそういう意味ですから、間違わないでください。

「わがわざは神のわざである。神さまの力でやっている。自分は無力なんだ、自分にはわざはないんだ」

ということですよ。

皆さん、私の告白を聞いていて楽しいですか。楽しくなかつたらウソですよ。難しくも



何でも無い。楽しいんだ。楽しくなかったらダメだ。楽しくてしようがないということです。「福音」なんて言わないで、「楽音」と言えがいい。音楽みたいなものだ。福というと、幸福の福だと思う。「福音」という言葉はあまりいい言葉ではないね、楽音なんだ。楽しいんです。

「われエホバを喜ぶ」

という言葉がある。神さまを喜ぶ、キリストを喜ぶ。そういうのが業ならざるわざです。神・キリストのわざです。

あなた方も、すること為すことがみな神・キリストの力、智慧、生命、光でやっていく。皆さん一人ひとり何をなさっていらつしやろうとも、それはみなそれぞれちよつと違うんです。いろいろな方がここにいらつしやるから、おもしろいよな。私はあなた方を本当にキリストにあつて掛け替えのないお友だちだと思つています。

旧約のハバク書に、

「然ながら我はエホバによりて楽しみ、わが拯救の神によりて喜ばん。主エホ

バは我が力にして我が足を鹿の如くならしめ、我をして我が高き処を歩まし

め給う。」(ハバク書3・18～19)

とある。おもしろいね。まあ、聖書ほど面白くて楽しい本はない。いい加減な本なんか読まないで、聖書だけを読んでごらん下さい。聖書を読んでいて、聖書が楽しくなったら本当です。作者の心の中に自分が入つてしまふ。

これは自分が書いたんだよ

と思うくらいに。

大したもんだね、讚美歌というのは。どういう運命環境になろうとも、神・キリストを讚美する。讚美歌が歌えないようだったらダメですよ。自分の運命環境にかかわらない。夜遅いと、大きな声を出すわけにはいかないから、口ずさんで歌っていればいい。サタンに襲われるような時に、マルチン・ルターがフィリップという友だちに、

「さあ、一緒に讚美歌を歌おう。サタンを退けよう」

と言った。讚美歌を歌うと、サタンは逃げていく。キリストにはかなわないから。いや、楽しいね。

